

小さなことも一歩ずつ ～支えられながら技術を身につける～

1. はじめに

本誌の60周年を記念して、これからの職業訓練の担い手である若手指導員の本音を聞くインタビュー記事の連載をスタートしました。「若手指導員の声」と題し、先輩からかけてもらった印象深い言葉や嬉しかった対応などをお聞きます。若手指導員とベテラン指導員の架け橋になることを期待しています。

今号では、埼玉職業能力開発促進センターの木村翔威指導員にインタビューを行いました。

【木村 翔威 指導員のご紹介】

関東職業能力開発大学校出身。初任地は新潟職業能力開発促進センター。指導員歴は7年目。好きなことは世の中のニュースを見ること。好きな言葉は「小さなことも一歩ずつ」。



2. 好きなこと、好きな言葉

「技能と技術」誌編集部（以下「編集部」） まず、木村先生ご自身のお人柄が伝わるようなことをお聞きしたいのですが、好きなことや好きな言葉はありますか。

木村指導員（以下「木村」） 好きなことは、世の中のニュースを見ることです。結構好きですね。私たちの機構は厚生労働省の管轄でもありますし、世の中の流れにいろいろ左右される部分もあると思うんです。今この業界で人材の需要があるとか、そういうことも分かると思うので、ニュースを見ながら、「こういう仕事これから需要があるかもしれない」と感じるのが結構好きだったりします。

編集部 好きな言葉はいかがですか。

木村 「小さなことも一歩ずつ」ですかね。そういうことは大事にしたいなと思っています。

3. 初任地での様子

編集部 木村先生は今、指導員になって何年目になりますか。

木村 7年目になります。

編集部 新人の頃の心配や困り事があれば教えてください。

木村 もともと私は関東能開大の出身で、4年間機械系を学びました。機構（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構）に就職後は金属加工科に配属となり、当初は新しい専門分野への挑戦という

印象がありました。それまで溶接を専門的に学んできたわけではありませんでしたが、機械系で培った知識を生かしながら、配属後に溶接の技術を一から学び、理解を深めていきました。

編集部 機械系のご出身で、配属後に溶接を担当することになったのですね。

木村 職業能力開発総合大学校で長期養成課程指導員研修を受けて、その中で溶接の研修が1か月くらいありました。その後は施設に行き、先輩に聞きながらやっていくという感じでした。

編集部 最初の頃は大変でしたか。

木村 そうですね。やはり大変でしたし、今も実は大変ではあります。なかなか簡単ではないです。溶接って、スポーツみたいなもので、1回聞いたからすぐ教えられるというわけではないんです。自分の中で習熟して、きちんと落とし込んで、その上で勘とかコツみたいなものを受講者に伝えていかないといけない。まず自分ができないことにはどうにもならないので、ひたすら練習、練習という感じでした。そこから授業に反映させていくのが、なかなか難しかったですね。

編集部 少しずつ乗り越えてこられたのですね。先輩からの助言やサポートで印象に残っていることはありますか。

木村 初任地は新潟職業能力開発促進センターだったんですが、そこ先生方が本当によくくださって。特に最初は、そこまで技術的なところに注力しなくてもいいから、まずは安全第一でやっていけばいいですよ、と言っていただきました。「100点を目指さなくていい。50点とか60点でもいいから、その後どんどん改善していけばいい」と何度も言っていただいて。もちろん本当は高い技術でやらなければいけないのですが、その言葉にはかなり救われたと思います。

編集部 完璧を求めすぎなくてよい、という言葉に支えられたのですね。

木村 はい。かなり心強かったです。

編集部 他にも印象深い先輩の言動はありますか。

木村 放課後に私が溶接の練習をしていると「じゃあ一緒に溶接やろうか」と言って付き添ってくださ

った先輩がいて、それが非常に力になったと思います。どうしても一人で練習していると限界があるので、忙しい中でも一緒にやってくださった先輩方には、本当に頭が上がらないですね。

編集部 他の業務面で支えてもらったこともありましたか。

木村 就職支援や物品調達の関係など、指導員には訓練以外にもいろいろな業務がありますよね。でも、自分が新人の頃は、先輩がそういう他の業務をかなり抱えてやってくださっていたんです。自分としては「手伝います」と言ったんですが、「今は訓練の方に集中して、残りは俺がやるから」と言ってくださって。本当にありがたかったなと思います。今になって、なおさそう思います。

編集部 一方で、「こうしてほしかったな」と思うことはありましたか。

木村 当時は、先輩がどれだけ多くの仕事を抱えていたのか、あまり分かっていなかったんです。でも今、埼玉に来て、予算や物品調達、就職支援などに取り組むようになって、「こんなに大変だったんだ」と分かるようになりました。たぶん当時の先輩は、今の自分の倍くらいのことをやっていたと思います。だから今になって思うのは、もう少し仕事を割り振ってもらってもよかったのかな、ということです。もちろん、それは優しさでそうしてくださっていたのだと思いますが。

編集部 なるほど。新人ではなかなか気付けないことですね。

木村 そうですね。あと、忙しそうにされているのは感じていたのですが、ちょっと聞きたいなと思って、なかなか聞きに行けなかったんです。聞けば絶対に教えてくれるような優しい先生だったので、逆に、聞いたら作業を止めて来てくれるだろうなと思ってしまって、それで聞けなかった、というのはありました。

4. 埼玉職業能力開発促進センターに勤務して

編集部 埼玉職業能力開発促進センターでの勤務について、お聞かせいただけますか。

木村 埼玉職業能力開発促進センターは、全体的に指導員が多く、電気とか情報とか、他の分野も含めて学べることが多いです。研究公開訓練などもありますし、いろいろな先生の訓練の状況を見ることができるんです。そういう面では、若手指導員の私にとっても、すごく勉強になることが多いなと思っています。

編集部 他科の先生の研究公開訓練も見られるのですか。

木村 はい。自分の訓練が入っていない時は、できるだけ積極的に出るようにしています。特にベテランの先生方の訓練の進め方や教え方などは、他の分野であっても「ここは取り入れたいな」、「ここは真似したいな」と思う部分が多く、とても勉強になります。

編集部 技術の向上に向けた取り組みについて、お聞かせいただけますでしょうか。

木村 今は60歳のベテランの先生と組んでいるんですが、まだまだ自分は技術が足りないところが多いので、そういう部分はたくさん教えてもらっています。本当にいい先生ですね。

授業を聴講していても、どうしても受講者への指導がメインになるので、それだけでは足りない部分もあります。なので、聴講もしつつ、放課後などに少し聞いて、時間を取って教えていただく、という形ですね。

5. 理想の先輩像

編集部 今後、ご自身が先輩の立場になったとき、どんな先輩になりたいですか。



木村 実は今、まだ後輩ができたことがないんです。でも、もしそういう立場になったら、話しやすい雰囲気は作りたいなと思っています。ただ、それってなかなか難しいので、むしろこちらから積極的に話しかけていきたいですね。業務のことだけではなくて、プライベートなことでも、ちょっとした雑談でも話せるようになると、他の業務の相談もしやすくなると思うので。忙しい中でも、コミュニケーションは積極的に取りたいなと思っています。

編集部 それは、ご自身が先輩方にそうしてもらってきたからこそその思いでもあるのでしょうか。

木村 そうですね。

編集部 最後に、これから若手指導員として歩いていくうえで、大事にしていきたいことを教えてください。

木村 やはり、「小さなことも一歩ずつ」だと思います。最初から完璧にできるわけではないですし、特に溶接のように、自分でできるようにならないと教えられない分野では、地道に積み重ねていくしかありません。先輩方に助けていただいた分、自分も少しずつ力をつけて、将来は後輩に対しても話しかけやすい雰囲気を作れるような先輩になれたらいいなと思っています。

編集部 お忙しいなか、ありがとうございました。

